

社会福祉学は災害にどう向き合うのか

東日本国際大学 菅野道生

大災害は、「いのち」と「暮らし」と「まち」を一瞬にして破壊し、社会福祉実践が対応すべき問題（群）を極めて短期間のうちに、凝縮したかたちで発生・顕在化させる。

そこでは施設・在宅を含む要援護者の支援や社会福祉関連制度、福祉コミュニティづくり等の平常時の課題が浮き彫りになることに加えて、災害によって暮らしを壊された人々が新たに担わされる中長期的・総合的な生活問題への対応も迫られることになる。

甚大な被害をもたらした東日本大震災後、多くの社会福祉関係者が平常時とは異なる状況の中でのソーシャルワーク実践に取り組んできた。

災害時のソーシャルワーク実践が直面した諸課題を、社会福祉の理論研究にどのように位置づけ、深めていくのかが、改めて問われていると思われる。

本報告では災害時ソーシャルワークの研究動向を概観し、東日本大震災後の状況も踏まえ、今後の理論研究の方向性について考えたい。

I 災害時ソーシャルワークの研究動向

(1) 災害時ソーシャルワーク研究の主要テーマ

- 多様な範囲とレベルにわたる研究テーマ

(2) 災害時ソーシャルワーク研究の主要な方法論

- 個別事例の実践報告とその検証→災害に備えたソーシャルワークの枠組みの提案

(3) 理論研究の成果と実践とのフィードバック

- 事例集、研修、マニュアル化、政策化、養成課程におけるカリキュラム化、等

II 災害時の実践を通して考える、社会福祉研究の課題

(1) 災害時ソーシャルワーク理論の一般化の困難性

- 災害はすべて違う？－災害の種類と地域による諸条件の差異
- 災害のたびに、「同じような議論」が繰り返される現状？

(2) 災害時ソーシャルワークは社会福祉学にどう位置付くのか

- 平常時ソーシャルワークと災害時ソーシャルワークの連続性と相違の整理
- 災害時ソーシャルワーク理論の体系化と社会福祉学における位置づけの課題